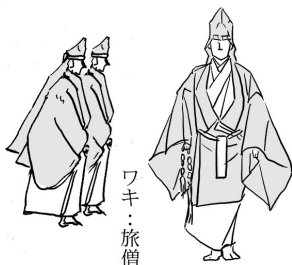


# 「定家」

北国の方から来た僧（ワキ）が都を見物したいと京へ上つてきました。



ワキ：旅僧

旧暦の十月十日を過ぎた頃で、冬枯れの梢にところどころ残る紅葉の風情が素晴らしい夕方です。



上京のあたりでひと休みしていると、時雨が降って来たので、近くにある宿りに雨をしのぎに雨を入りました。

そこへ、一人の女性（前シテ）が現れて、僧の一行に声をかけます。



前シテ：里女

能面：曲見



女の言うことは、一時雨の亭という場所です。

時雨の亭



ここは藤原定家の建てた時雨の亭、毎年定家はここで歌を詠んだということでした。



それも今は昔の事、露の宿りも枯れが庭の有様を見渡します。



それから女は、僧たちを式子内親王の墓へと案内します。



式子内親王は賀茂斎院でしたが、ご退任された後、定家が人目を忍んで彼女の元へ通い、深い契りを結ばれました。



その後まもなく式子内親王は亡くなりましたが、定家の執心は篤となつて墓にまつわりつき、互いに妄執の苦しみから逃れられないままです。



そして女は自分が式子内親王の霊であるかの如く姿を消します。



僧たちが月光の下で内親王の霊を吊っていると、墓の中から内親王の霊（後シテ）が現れます。



能面：瘦女

後シテ：式子内親王



定家墓に苦しめられていた内親王でしたが、僧の「薬草喻品」によって自由になつた舞を舞います。



しかし、内親王が墓の中へ消えると元のように定家墓が墓に這い、その姿を隠してしまつたのです。

